

磐梯火山南西麓エリア

CONTENTS

1. 磐梯火山南西麓エリアの地形と地質…………… 2
2. 翁島岩なだれと流れ山…………… 3
3. 磐梯町の七石…………… 5
4. 龍ヶ沢湧水…………… 6
5. 慧日寺跡…………… 7
6. 高僧・徳一…………… 9
7. 磐梯神社の舟引き祭りと巫女舞…………… 11
8. 磐梯吾妻修験の展開…………… 13



交通 JR磐越西線磐梯町駅からもよりのFエリアまで徒歩で約10分

- 36 龍ヶ沢湧水：磐梯西山麓湧水群を代表する湧水池
- 37 磐梯神社：慧日寺の鎮守の磐梯明神を起源とする神社
- 38 慧日寺跡：徳一菩薩により創建された寺院跡 国史跡
- 39 岩なだれ堆積物：翁島岩なだれで運ばれた岩塊
- 40 修験道：慧日寺を基点として二つのルートがあった
- 41 磐梯山慧日寺資料館：慧日寺関連の文化財を多数展示公開

※公共交通機関がジオサイト周辺を通っていないため、自動車利用がお勧めです。

1 磐梯火山南西麓エリアの地形と地質

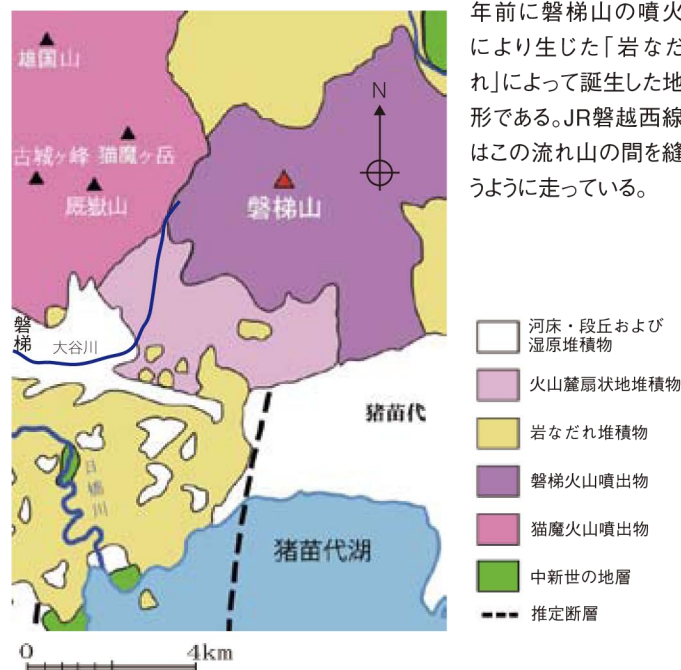
磐梯火山南西麓エリアは、北に^{うまやさん}厩嶽山・^{ねこま}古城ヶ峰・猫魔ヶ岳など猫魔火山の活動により形成された山々、中央に大谷川に沿った低地帯、そして南に磐梯火山の岩なだれにより生じた流れ山地形が広がっている(図1)。

猫魔火山は今からおよそ100万年前に活動を開始した火山で、東側にある磐梯山と同じ安山岩質のマグマの噴出により山体が成長し、約40万年前にはその活動を終えた。山体の南麓斜面には扇状地^{えいち}が広がり、慧日寺跡もその地形の上に立地している。

大谷川は、猫魔火山や磐梯火山から流れる支流を集め、西方に流れ、日橋川と合流し会津盆地に流れ込む川で、川の南北両側に河岸段丘を形成している。磐梯町の中心市街地の北半分はこの段丘面上に立地している。

このエリア南部には、お椀を伏せたような丸い形をした丘陵がたくさん見られ、それは「流れ山」と呼ばれている。この流れ山は、今からおよそ3~5万

年前に磐梯山の噴火により生じた「岩なだれ」によって誕生した地形である。JR磐越西線はこの流れ山の間を縫うように走っている。



(図1) 磐梯火山南麓～南西麓の地質図(鈴木・真鍋(1988)をもとに作成)

2 おきなしず 翁島岩なだれと流れ山

今から3～5万年前、噴火により磐梯火山の古い山体が大規模に崩れた。崩れた山体の体積は約4km³(東京ドームおよそ3000杯分)と見積もられている。この崩壊により、大小の岩が水をほとんど含まない状態で流れ下った。これは「翁島岩なだれ」と呼ばれ、現在の磐梯山南西麓に広く流下し、一部は西方の会津盆地にまで達した(図2)。大きな岩石ブロックが粉碎されずに高速で流れ下り、それぞれが「流れ山」と呼ばれる丸い丘をたくさん作った(図3)。流れ山の直径は500mに達するものがある。



(図2) 猪苗代湖北西岸の火山土地条件図(国土地理院,2003)より

JR磐梯町駅の南方300～400mに小さな丘があり、その中を線路が通り、線路の両側に大きな岩の塊かたまりが見られる(写真1)。この丘が流れ山のひとつであり、流れ山の内部の岩石を観察することができる。大きな岩は安山岩の塊であり、かつて磐梯火山の山体を作っていた溶岩である。ここでは、安山岩の巨岩からなる岩塊相と、岩塊相の間に多種の岩片が混じった泥質の基底相が見られる。また、岩には、ジグソークラックと呼ばれるジグソーパズルのような割れ目(写真2)が見られる。これらは岩なだれ堆積物に特徴的な形態である。



(図3) 岩なだれと流れ山



(写真1) 岩なだれ露頭



(写真2) ジグソークラック

コラム 翁島岩なだれの年代

翁島岩なだれが起こった年代は火山灰の年代により推定されている。火山噴火により飛散した火山灰(テフラ)はごく短時間に日本各地に降下し、それぞれの火山灰の年代が炭素の放射性同位体や地層の厚さをもとに算定されている。翁島岩なだれ堆積物は、DKP(大山-倉吉テフラ)(50000～52000年前)より上で、HP1軽石層(30000～46000年前)に対比される地層の直下にあるので、その年代は3万～5万年前と推定できる。

3 磐梯町の七石

江戸時代の記録には、磐梯町内の奇岩として、鏡石^{かがみ}・口明石^{くちあけ}・平石^{ひら}・烏帽子石^{えぼし}・髪水石^{かみすい}・亀石^{かめ}・大持石^{おもち}が記されている。このうち現在確認できるのは鏡石と平石と口明石の三つである(図4)

鏡石 布藤西方(写真3)

谷底平野にある水田の真ん中に、大きさ縦5m、横7m、高さ3mで孤立している。安山岩の溶岩である。周辺は翁島岩なだれ堆積物による流れ山地形が密集している。鏡石は流れ山を形成していた安山岩の巨岩のひとつであろう。



(写真3) 鏡石



(写真4) 平石

平石 沼田北方(写真4)

大谷川北岸の河岸段丘面上に孤立している。大きさ縦2.5m、横6m、高さ1.5mで地上で見られる限り平板上の外形をしている。鏡石と同じく石質は安山岩の溶岩である。この地域には周辺に流れ山地形が見られない。おそらく流れ山が大谷川により侵食を受け、流れ山を構成していた巨岩が運ばれてここに堆積したものであろう。



(図4) 鏡石・平石・口明石の位置

4 龍ヶ沢湧水^{ゆうすい}

龍ヶ沢湧水は日本名水百選に認定されている「磐梯西山麓湧水群」を代表する湧水池である(写真5)。猫魔火山の噴出物である溶岩流(葉山溶岩)の末端部にあり、地下水が溶岩の割れ目から湧き出ている。火山は過去の噴火による溶岩のいくつかの層で雨水を通過させ、このようなすばらしい湧水を造り出している。

巨石の間から湧き出る湧水は、早魃^{かんぼつ}に際しても決して枯れることがないと言われ、弘法大師雨乞いの霊場として古くから知られていた。江戸時代には、藩命による大規模な雨乞いの儀式が何度も行われた記録が残っており、地元では戦後まで続いていた。

この湧水は、現在磐梯山慧日寺資料館の庭園に引水されており、自然水愛好家の名所となって、連日給水する人々でにぎわっている。



(写真5) 龍ヶ沢湧水

5 慧日寺跡

徳一によって開かれた慧日寺は、会津の名峰磐梯山を東に望む山麓一帯に広く展開した山岳寺院である。縁起によれば、開基は平安時代初期の807(大同2)年といい、以後明治初年の廃寺に至るまで、実に一千年以上の歴史を刻んだ。1809(文化6)年に完成した『新編会津風土記』には「徳一当寺に住せしより以来相續て寺門益繁榮し、子院も三千八百坊に及び、数里の間は堂塔軒を比し、甍を並べ壮麗言なりしとぞ。されば会津四郡の地大方は寺領なりしに…」と記されたように、当時最先端の思想や文化を講求する拠点寺院として、会津地方の文化熟成に大きな影響を与えた。

長い歴史の中では盛衰も繰り返した。例えば、徳一の没後も発展を続けた慧日寺は、平安末には越後の城氏と関係を持つようになり、寺勢はいよいよ最盛期を迎える。しかし、城氏との関係から源平の争乱に巻き込まれ、一転寺は衰勢に向かう。室町期までには復興が進み、その頃の実景を描いたとされる「絹本着色恵日寺絵図」には、東国屈指の大伽藍と共に門前



(写真6) 慧日寺跡の鳥瞰

には寺院都市とも呼ぶべきまち並みを見ることができる。その後、天正年間には伊達・葦名の戦いで罹災し、多くの伽藍が焼失したといわれ、その後近世に至っても頻繁に火災の記録が残る。

歴代住持のたゆまぬ尽力の下、法灯を守り栄枯盛衰一千年余の星霜を経てきた慧日寺ではあったが、明治政府がとった神仏分離政策に伴う廃仏毀釈の波の前には、さしもの名利も耐え切れず、ついにその歴史を



(図5) 絹本着色恵日寺絵図

閉じることになる。廃寺後の慧日寺には、鎮守社であった磐梯明神が郷社として祀られ、一帯は磐梯神社境内へと変遷を遂げていった。かつての大伽藍を伝える礎石群も次第に草藪に埋もれ、寺宝もこの頃から徐々に散逸していったという。

戦後間もなくから学術的価値が注目されていた慧日寺跡は、その後文化財保存の機運が高まる中、昭和45年12月に約36,000㎡が国の史跡に指定される。昭和61年8月には、指定後の開発に伴って発見された関連遺跡の追加指定も行われ、現在総指定面積は約170,000㎡にも上っている。

指定後は貴重な歴史遺産の活用を目指し、町による史跡整備事業が進められている。南都出身の徳一が、教学研さんや布教の拠点としてこの地に創建した慧日寺。平成15年度から始まった史跡の本格的な整備にあたっては、その特徴を前面に出すため、慧日寺初期の遺構を対象とする方針が採られ、遺構の平面的な表示整備のみならず、建物の立体復元整備も行われている。とりわけ中心伽藍の南半部は、慧日寺跡の中で最も特徴的な遺構でもあるため、いわゆる金堂院を形成する部分(金堂・中門・石敷き広場)を立体復元し、慧日寺独自の儀礼空間が体感できるようになった。復元された金堂の内部は、慧日寺の歴史の一端を紹介する展示スペースとしても公開されており、同時に整備後の積極的な活用として、金堂院を利用したさまざまなイベントも企画開催されている。



(写真7) 金堂院の復元整備



(写真8) 金堂内部の展示



(写真9) 金堂を活用した声明の公演会

6 高僧・徳一

古代会津の仏教史上に大きくその名を刻んだのが、慧日寺を開創した法相宗の僧「徳一」である。彼の出自や没年には諸説あるが、同時代にあった最澄や空海などとの関係から、概ね奈良時代の後半から平安時代初め頃の人物とみられている。

若い頃は南都の寺院に在ったが、都の喧騒を離れ自らの理想の地を追い求めて東国へと移り、この地を拠点に仏法の研さんに励んだという。やがて辺土会津に居ながらにしてその博識は最澄や空海にも届き、特に最澄とは三乘一乗教学論争として名高い「三一権実論争」を戦わせた。論争は著作の応酬という形で展開されたが、最澄は自著の中で徳一を「麁食者、弱冠にして都を去り久しく一隅に居す」と表現しており、もともと都にいたが日本の一隅へと去ってから久しいことを述べている。同書の冒頭には「奥州會津縣盪和上」とあることから、これを著した817(弘仁8)年には徳一が会津に住んでいたことは確実である。南都法相教学を代表しての論戦が遙か会津の地から繰り広げられたことは、一千二百年前という時代を考えた場合、そのエネルギーたるやいかばかりであったことか。結果として最澄の法華一乗思想と真っ向に対峙したこの論争は決着を見ず、二人の没後も両教団で継承されていくが、応酬を通じて天台教学自体が大成されていくなど、古代仏教思想の深化に大きく寄与する結果となった。

一方空海は、弟子の康守を遣わして新来の真言密教經典を書写して布教する協力を依頼した書簡を徳一に寄せている。その冒頭には「私が聞いているところでは、徳一菩薩は嚴重に戒律を守っていて、珠にたとえと氷の玉のようであり、その智慧の深く澄みきったさまは大海のごとく承っています。おんみは静かな山中に修行の場を求めて都を離れ、錫杖を振りながら東に行き、(東北の地に)始めて仏法の旗を立てて、人々の耳や目を開かせ、高らかに法の道を説き、あらゆるものもっている仏のこころを奮い起こされました。」とあって、賞辞と共に都の喧騒を逃れ、仏法の専修を目指して



(写真10) 徳一坐像



(図6) 徳一関連寺院の分布

東国へと至った経緯を記している。

一般的に知られる徳一の姿は、こうした学問的な側面のみであるが、後世人々から大師や菩薩と称された背景には、決してそうした一面だけではなかったはずである。史料こそ残っていないが、そこには民衆を仏法により救済するという仏教の伝道者としての姿も確かにあったに違いない。現在、徳一開創の伝承あるいは関係伝説をもつ寺院は、福島・茨城両県を中心として約90ヶ寺が知られている(図6)。陸奥から常陸へかけて、国域を越える信仰の展開は、諸官寺の教域をも大きく凌駕しており、民衆の徳一帰依がいかに深遠であったかを物語る。空海が書簡の冒頭で、徳一に対し中国に始めて仏教を伝えた摩騰や、揚子江以南の地に始めに仏教をもたらした康僧会になぞらえ最大級の賞辞を贈っていることから裏付けられるように、その姿はまさに東北仏教の開創者と呼ぶにふさわしいものであった。

現在恵日寺には、奈良正倉院のほか全国的にも数例しかない古式の密教法具である「白銅三站杵」(国指定重要文化財)が伝わっている。当時最先端の仏教文化の文物がこの地に請来された背景には、稀代の宗教家「徳一」の存在があったことはいうまでもない。

磐梯山慧日寺資料館

- TEL/0242-73-3000
- 交通機関/磐越自動車道磐梯河東ICから車で約5分
- 開館時間/9:00~17:00
- 休館日/冬期閉館(12月1日~3月31日)
開館期間中は無休
- 入館料/大人500円 高校生400円
小中学生300円



■URL:<http://www1.town.bandai.fukushima.jp/kanko/enichiji/>
史跡慧日寺関連文化財の保存と活用を目的として昭和62年8月にオープン。国指定史跡の「慧日寺跡」に隣接し、史跡来訪者のガイダンス施設としての機能を兼ね備える。史跡整備事業で復元した金堂・中門の公開もっており、資料館と併せて会津仏教文化の礎を築いた慧日寺を総合的に紹介している。

7 磐梯神社の舟引き祭りみまと巫女舞まい

慧日寺の創建にも深く影響を与えた磐梯山は、かつて活発な火山活動がもたらした災禍さいかから「病脳山びょうのうざん」と称された。一方で万葉集には「会津嶺あいつね」と詠まれ、天空そらに聳えるその美しい山体はまさに天へと伸びる磐いわの梯子いわはし「磐梯山」の名にふさわしい。また、古来神々の宿る霊山として篤あつい信仰を集めていたことは、式内社に「磐椅神社いわはし」の名が見えることによっても知ることができる。このように、慧日寺は開基以来、磐梯山信仰を巧みに習合し、平安時代を通して大きく繁栄していったのである。

その山頂を東に望む山麓の磐梯町本寺地区には「磐梯神社」が鎮座している。もともとは慧日寺の鎮守であった地主神の「磐梯明神」を起源としており、明治初めに慧日寺が廃寺になった際に郷社として分離独立したという経緯をもつ。

この磐梯神社において、毎年春分の日しゅんぶんの神社祭礼で行われる作占いの神事が「舟引き祭り」である。恵日寺に伝わる江戸時代の年中行事記録には、元来は毎年旧暦の2月中旬に国家安全と五穀豊穡ごこくほうじょうを祈願する「御国祭みくにまつり」の中で行われていたことが記されており、廃寺に伴って磐梯神社へと引き継がれた。この神事は、両端に長い綱を結び三俵の米俵を積んだ舟型の台を東西に分かれた氏子衆が社殿前で引き合って、その勝敗によ



(写真11) 磐梯神社



(写真12) 勇壮な舟引き

て作柄を占うものである。三回戦の勝負で、東が勝てば豊作、西が勝てば米の値段が上がるかとされており、野良着をまとった引手が太鼓の合図とともに威勢よく引き合う姿は実に勇壮である。舟の前には、磐梯明神の面かぶを被って幣束へいすくを持った神職が立ち判定を行うが、このように神が直接人前に姿を現し神託を下す例は民俗学上極めて稀であるという

また、祭礼の冒頭には磐梯明神を迎えるため、神前で地元地区の女児が舞手となって「巫女舞」が奉納される。この巫女舞も同様にかつては恵日寺の年中行事であった「児之舞」を起源とするとみられ、同じく廃寺後磐梯神社に継承されたものである。明治期に一時途絶えたが、約80年の時を経て昭和45年に復活した。現在は榊・弓・太刀を依代とした三座が伝承されているが、以前はそのほかの舞もあったという。これら神社祭礼にまつわる一連の神事は平成17年に「磐梯神社の舟引き祭り」と巫女舞として県の重要無形民俗文化財に指定された。



(写真13) 巫女舞(榊の舞)

